

芥川龍之介「上海游記」

——里見病院のことなど——

戸田民子

「上海游記」は大正十年八月十七日より九月十二日まで二十一回に亘り、『大阪毎日新聞』（朝刊）に連載された。これは後、『支那游記』（大14・11 改造社）として『江南游記』・『北京日記抄』等とともにその中に編まれている。

一体に、この「上海游記」についての評価は、と言うより『支那游記』そのものが、管見によれば評家の目に軽んぜられている傾向が強い。その代表的意見として吉田精一の、「要するに小説家の見た中国であって、新聞が、もしくは新聞の読者が期待したかも知れぬような、中国の現在や将来を深く洞察し得たものではない」^①があげられる。

一方、「上海游記」を執筆にあたった芥川は、「毎日紀行書きにへこたれ」（大10・8・3 南部修太郎宛、「胃腸直らずその為痔まで病み出し（略）瘦軀一層瘦せて蟻螂の如く」（大10・9・8 薄田淳介

芥川龍之介「上海游記」

宛なり、ついには神経衰弱にかかり、湯河原へ静養に出かけた。言うまでもなく、「へこたれ」、「蟻螂の如く」^②なった要因は、あしかけ五か月に亘った中国旅行の過労である。

こうしたことから従来、芥川と中国旅行については、作品論上からは先の吉田精一のそれであり、評伝上からは森本修の、「中国旅行を境として、龍之介の健康は年を追って悪化し、それに伴って創作力も減退しはじめた」^③に代表される如く、いずれも否定的見解である。確かにマイナス面ばかりが露呈してしまった感がないにしもあらずに見える芥川と中国旅行であったことは否めない。

しかし、一九八一・二年の両夏、旅の途次いずれも上海の地に立ち寄ることのできた筆者には、——ことに芥川が入院した里見病院跡を尋ね、更には長崎にその家族を訪ね得る機会を得たことにより——「上海游記」に今一つの見方ができるのではないかと思われた。

『夜来の花』を上梓した大正十年三月、芥川龍之介は「大阪毎日新聞社の命を受け」（『支那遊記』自序）、海外視察員として中国に出かけた。

三月十九日に東京を発った彼は、当初の予定では門司まで直行し、二十一日の日本郵船の熊野丸に乗船の筈であった。が、途中で熱発し、大阪で下車を余儀なくされた。治療の後門司に向かい再度発熱した芥川は、結局二十八日門司発の日本郵船筑後丸に乗船、三十日上海に着いた。しかし上陸後、中一日おいた四月一日、里見病院^④に入院し約三週間の病院暮らしをすることとなった。

このことから、現地からの紀行は、「毎日書く訣にも行きませぬまいが上海を中心とした南の印象記と北京を中心とした北の印象記と二つに分けて御送りする」（大10・3・11 薄田淳介宛）という芥川自身の予定も、「新人の眼に映じた新しき支那／近日の紙上より掲載の筈」と大見出しをつけ、

吾が社はこゝに見る所あり、近日の紙上より芥川龍之介氏の『支那印象記』を掲載する（略）氏は今筆を載せて上海に在り、江南一帯の花を狩り尽した後は、やがて春をもとめて北京に上るべく、行々想を自然の風物に寄せると共に、交り彼の土の新人に結びて、努めて若き支那の面目を観察しようとして居る。新人の観たる支那が、如何に新様と新意に饒な

るものであるかは唯本編に依つてのみ見られよう。^⑤ という『大阪毎日』の大きい期待も弊え、作品発表は帰国後とされた。

幼少期より漢文学に親しみ、長じて中国文学に素材を得、その作品中にそれを十分駆使し、更には書画骨董趣味旺盛な芥川にとつて中国は、「僕も支那へ行きたいんだ（略）上海ちゃ一月いくらで暮らせるだらう安ければ僕も一月位行つてみたい」（大7・11・20 斎藤貞吉宛）国であった。また、友人である谷崎潤一郎が「大正七年十一月十二月に、佐藤春夫が同九年六月に中国を旅行し、帰国後発表した紀行作品を見て大いに触発されていた折の派遣要請であつてみれば、風邪をおしての出発にも、中国に対する積極的志向を見ることが出来る。このことは、出発に先立ち催された送別会の席（精養軒）で、「支那へ行つたら昔の支那の偉大ばかり見ずに今の支那の偉大もさがして来給へ」と述べた里見弴の言葉に「私もその心算であるのです」（大10・3・11 薄田淳介宛）との意気込みや、「留守中は何時なん時紀行が新聞に出るか知れぬ故始終新聞に注意し切抜かれ置かれたし」（大10・3・26 芥川道章宛）等からも十分窺われることである。

その彼が、上海上陸後直ちに入院生活を余儀なくされたわけであるから、大阪毎日との文債を反故にしなければならなくなった道義的責任の意識も強く働いたであろう。しかしそれ以上に、日頃より自己の健康を神経質なまでに気遣う芥川にとって、異郷の地での発病は大いに不安の念をかき立てたに違いない。少なくとも

も、「一時は上海にて死ぬ事かと大に心細く」(天10・4・24 芥川道章宛や、「急に死ぬ事が怖くなりなぞした」)〔上海游記 五 病院。上海游記〕は以下「上海」と略記)等を見ている限りではそう思われる。

二

ここで筆者には素朴な疑問が頭を拾ってきた。すなわち「死ぬ」かと思う程の病を得た芥川が、退院後、帰国もせずその後二か月余、旅行を続けたということはどうしたことなのであろうか？と。特に「西安は戦塵未収まらず」(天10・6・2 薄田淳介宛)、「大同へ行かんとする所にストライキ起り汽車不通」(天10・6・

24 芥川家宛)——のみならず、滞在していた上海は、その前年の五四運動から排日風潮が高まっていた——等に見られるごとく、中国は動乱の中にあつた。が、やはり芥川は旅行を続けた。いよいよ自信が失くなれば、「どうも健康が確かでないから(略)すぐ漢口から北京へ行かうと思ふ」(天10・5・16 小六隆一宛)と予定変更に出た彼のことだから、いかに大阪毎日に対する義理からとて、無理を押ししての続行ではなかった筈である。

それでは「死ぬ」かと思つたのは芥川一流の大仰な表現であつて、実際は然したこともなし、と言ふことであつたのだろうか。しかし現実には彼は三週間余に亘り入院治療をした。

入院時の芥川を語るものとしての、第三者による資料及び証言

芥川龍之介「上海游記」

は、「小生の病気の事を毎日のやうに掲載」(天10・4・24 芥川道章宛した上海の新聞、そして入院先の里見病院関係者というところにならう。先ず、上海の新聞であるが、芥川が訪中した当時(一九二二)、上海では『上海日報』・『上海日日新聞』・『上海毎日新聞』(原名『上海経済日報』)及び週刊ではあつたが『上海週報』の四紙が邦字新聞として発行されていた。このいずれかに「病気の事」が掲載されたのであろうが、管見によれば杳として四紙共に今日迄、その存在すら把み得ない。念のため、原地紙『時報』の一九二一年三月・四月をあたってみたが、該当記事は見当らなかつた。次に、里見病院関係者であるが、これについては「里見さん」(上海)五 病院)の家族を識ることができた。

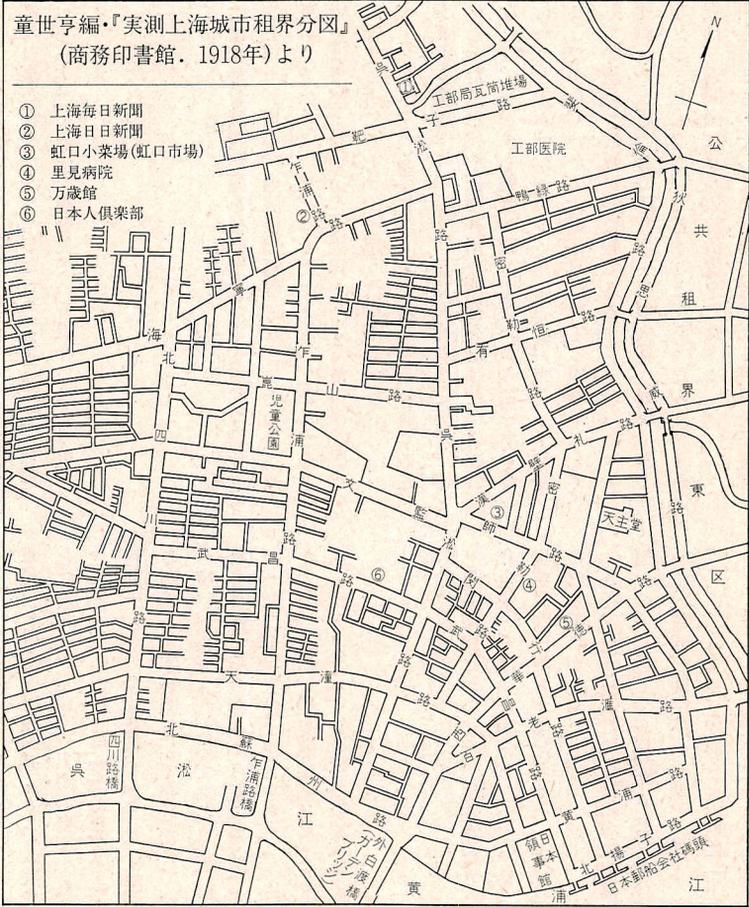
三

里見病院については、現在発行されている註解付き『芥川龍之介全集』では「未詳」^③となつている。『支那游記』においては、里見病院に限らず実に多くの「未詳」箇所が散在しており、調査の立ち遅れがみられる。

さて、里見病院は、芥川が上海滞在中に投宿していた「万歳館」のすぐ近く、密勒路A6号(現、上海市虹口区峨嵋路108号)にあつた。黄浦公園(旧、パブリックガーデン)を右にして、白渡橋(旧、ガーデンブリッジ)を渡ると眼前に「上海大厦」(旧、ブロードウェイマンション)がある。そこから五分程歩いて虹口市場を目指す西

童世亨編・『実測上海城市租界分図』
 (商務印書館・1918年)より

- ① 上海毎日新聞
- ② 上海日日新聞
- ③ 虹口小菜場(虹口市場)
- ④ 里見病院
- ⑤ 万歳館
- ⑥ 日本人倶楽部





(旧里見病院)

側が呉淞路、東側が峨嵋路になる。かつてこの辺り一帯には多くの日本人が住まいし、所謂日本人街と呼ばれていた地区である。

病院の建物は当時のままで、現在はアパートとなっている。芥川が海上陸第一印象として「どちらを眺めても、赤煉瓦の三階か四階である」(「上海」二第

一瞥(上))と述べた通り、ここも又赤煉瓦建築の四階建である。この建物の中央より左半分が里見病院で、芥川の病室はこの裏側の二階の細い道路に面した一室にあった。

芥川は上陸後、既に決められていた旅館「東亜洋行」へ向向いてみて、主人の態度の悪さや館内装飾の品位のなさに不快をもよおし、直ぐさま「万歳館」へ移動している。里見病院が、彼の意



(中央：里見院長 右：大島葎花)

にそまぬものであったなら、芥川はまた前者の如く変更をしたことであろう。しかし、ここで芥川は、友人知己に囲まれ、更には「未知のお客だった」人達の中から何時しか「遠慮のない友達づき合ひをする」(「上海」五 病院) ようになった新しい友人にも恵まれ、三週間余を過ごした。この新しい友人の中で、とりわけ芥川の関心を喚起した人物に、島津四十起・大島葎花・五十嵐飛天楼等、『海紅』を中心に活躍していた俳人達がいた。彼等は同時に里見院長と俳句仲間であった。また、日本人街の数ある病院の中から里見病院を紹介した村田孜郎も島江と号した俳人で、院長とは知己であった。そして芥川は、「余技は発句の外には何も無い」と言った人である。

里見院長は、里見義彦といい、狭処水の号を有した碧梧桐派の俳人でもあった。^⑫長崎医学専門学校を卒業後、明治三十九年上海に渡り、密勒路A6号で開業（内科）。上海事変後一時、出身地の長崎に戻っていたが、昭和十四年再び上海に渡り、同十八年十一月五日、狄思感路74番地にて死去。享年六十九歳であった。その折、大島葎花は「六十九年目の秋をうなづいて逝かれた」と、追悼の句を詠んだ。墓地は長崎市小島の正覚寺にあり、墓碑横の納骨堂には、後述の「炭をつぎつつ胎動のあるを語る」が刻まれている。

里見病院は、現在子息の里見正義氏が長崎市城山町にて開業、その跡を継いでいる。大正十年当時、小学校四年生であった正義氏には芥川の記憶は直接にはなく、里見家にはカルテはもとより短冊など、芥川に関する資料となるべきものは現存していない。更に、当時の看護婦田川くら（長崎市出身）も既に故人となっている。

しかし、密勒路の里見病院に住まいし、直接芥川と面談のあった森秋氏（里見院長の義妹、当時十八歳）に、里見正義氏宅において話をきくことができた。当時、上海、小町と噂されたという森氏は、今もその面影を十分に残した上品な老婦人である。「芥川先生は、大変に美しい、大変おやさしい方でございました」が、森氏の開口の言葉であった。

大正九年四月、芥川はそれ迄の作風の行きづまりを打開すべく「秋」（『中央公論』）を発表した。「秋」は大して悪くなさうだ案ずるよりうむが易かつたと云ふ気がする僕はだんだんあゝ云ふ傾向の小説を書くやうになりさうだ」（天9・4・9 滝井孝作宛）や、「僕は一つの難関を透過したよこれからは悟後の修業」（天9・4・13 南部修太郎宛）の所感に見えるように、芥川においては記念すべき作品の「秋」であった。^⑬

里見病院で森秋氏に会った芥川は、「秋」について語りきかせたが「女が小説なんぞ読んで……」の時代。森氏が素直に作品の名を知らない旨の返事をするとは彼はやさしく微笑したという。

「文学なんぞわからなくつたつていいのです」（天6・5・31 塚本文宛）や、「どんな人の前へ出ても 恥しい事はありません

何時までも 知らないものは知らないでお通しなさい、それがほんとうの人間のする事です」（同・9・4 同右宛）との女性観を有した芥川にとって、何よりも不快な存在は、

「今月中央公論に御出しになった『鴉』と云ふ小説は、大へん面白うございました」／「いえあれは悪作です。」私は謙遜な返事をしながら、「鴉」の作者宇野浩二に、この問答を聞かせてやりたいと思つた。（『上海』十九 日本人）

の如き似非令夫人・令嬢であった。更にはこうした女性達が、彼

の入院中、花束をどっさり抱えてかわるがわる病室に押しかけてくるのに辟易し、ついに院長に「面会謝絶」札を出してもらおう申し出、実践した。

こうしたことを見ていると、芥川が森氏に微笑した理由も自ずと領ける。そして、それは同時に入院中の芥川にとつて、心なごむやさしさとの出会いででもあった。

芥川の容態についての筆者の質問に対し森氏は、寝たきりの状態にあったのではないと語った。死の不安にさらされた芥川が？と問い直すと、森氏は芥川が入院中を抜け出し何度か蘇州へ出かけ、帰ってきて「蘇州美人に会つてきた」と話したこと・里見家の座敷でキチンと背広を着て、院長や既述の俳人たちとよく句会を催していたことを述べた。

この話から、同席の里見正義氏は芥川の病名「乾性肋膜炎」について、「長びいた風邪にはこの病名が用いられたものでした。芥川先生も日本を発つ前に風邪をひいておられたようですね」と。両氏の話の総合してみると、死ぬかも知れぬと述べたのは、やはり芥川の誇張表現であった、と同時に大阪毎日に対する手前もあったのであろう。更にはこの時既に『支那游記』の構成上の計算が働いていたのではないかと考えられる。が、いずれにせよ入院の直接的要因は、大都会上海から離れた奥地での病氣再発を考えた時、慎重を期して静養のためというのが穏当な見方ではなからうか。

六

ただ、ここで問題になるのは大阪毎日新聞記者村田孜郎の存在である。彼は上海にあって常に芥川と行動を共にし、具さにその行状を見聞していた筈である。芥川には「エックリレウヨウセヨ」(「上海」五病院)と電報を打った薄田淳介も、一方においては村田に職務として芥川の容態報告を当然求めていたことであろう。

村田を語るには、その資料はあまりに乏しい。が、そうした中で『中央公論』に掲載された数篇の彼の文章は、その人物像を形象させるに比較的忠実な資料となり得る。

いずれも日中戦争の特集を組んだ折、村田が中国より寄稿したものである。「支那学生運動の実体」(昭11・2)や、「上海・南京・香港」(昭13・4)を見てみると、記者としての冷理な一面が窺える。しかし、筆者は今ここでは芥川の入院に対してという観点から、所謂人間村田に注視したい。

宿のボーイの話ではすぐこの横町に十五になる娘がある、親が困つて売りたいといつてゐるが見に行かないかといふ。いくらだと訊いたら五十元位なら手放してもよいといつてゐるとかでボーイを案内さして一緒に見に行つた(略)そつと遠方から眺めたが相当な容姿の娘で、これなら五十元でも高くはないと思つた。ちよつと好奇心も伴つて買つて見たい気もしたが(略)日本のやうに(略)年が明けたら親許へ戻るといふ

やうなことはない。売られたが最後、本当の親とは永遠の別離をしなくてはならない。

右は、「人情地理・支那」(附12・2) 中の一文である。この現地からのレポートは、//幾らで娘が買へるか、//春を待つ娘が居る「済良所」^カ、//夢幻境「阿片窟」^カ等、八章から成り、当時もしくはそれ以前における中国の、世態風俗の一端を日本のそれと比較しつつ描いたものである。

売買される娘を「哀れ」と思う一方で、「買つて見たい気」をおこし、「一般民衆にとつての極楽は旧正月である(略)まつたく羨しい程の歓楽を尽す(略)その旧正月ももうすぐ間近に迫つて来てゐる。それまでは内乱も政変も当分お休みだ」(傍点筆者)などを見てみると、一見文明批評のそれであるが、全く別の像が同時に見える。それは、無意識の裡にはあつたかもしれぬが、どこかで右のような中国の世相風俗を受容し、しかも馴染んでいたと思われる村田像である。そして、中国に長年住まいした人達がつ所謂大陸と称されるものが村田の中に内在していたであろうことは想像に難くない。すなわち村田にとつて芥川の行状など、瑣末事にすぎなかつたのではなからうか。

こうして芥川は、友人知己とのうれしい・なつかしい出会いをもたらし、里見病院——彼が最も愛した土地、長崎の香が漂う病院——で、まさに快適な静養の日々を送つた。更にそこではもっと大きなものとの出会つた芥川であつた。すなわち母と子、そして父と子との邂逅である。

七

芥川が、その作品中に母をモチーフとして描き始めたのは、「黒衣聖母」(大9・5『文章俱樂部』・「南京の基督」(同・7『中央公論』)等に見られるように、大正九年の「秋」以降のことである。そして、この「秋」が作風の転換作となり得なかつたことは既に述べた通りである。

周知のように、芥川の生母ふくは、彼の誕生後七か月目に発狂している。芥川の心底には常にこの生母の存在が低音部として深層に沈潜していたことは確かであろう。その晩年、「僕の母は狂人だつた」(「点鬼簿」一)と初めて生母に触れた芥川ではあつた。しかし、この大正九年当時の作品には、所謂母を素材にはしてはいたが、それが即生母の描写に飛躍する状態には至っていない。その背景には、何よりも己が身辺を描くこと(私小説・心境小説)を烈しく拒否した芥川の姿を見ることができぬ。

芥川は里見病院でのことを「附記」として、「格別上海なるものに大関係もな」と述べながら、わざわざ次の一文を記した。

唯書き加えて置きたいのは、里見さんが新傾向の俳人だつた事である。次手に近什を一つ挙げると、/炭をつぎつつ胎動のあるを語る。(「上海」五 病院 傍点筆者)

従来この句についての解釈は、「胎動」に註を付し「胎児が母の腹の中で動き出すこと。ここでは中国の民主化運動をさす」と

なされている。この解釈の是非について里見正義氏にたずねたところ、次の文章のご教示を得た。

炭をつぎつつ胎動のあるを語る／この句は或いは記録に残った唯一つの父の句であるかも知れません。こう申しますのは、この句が芥川龍之介先生の上海遊記の中に紹介されているからでございます(略)この句が出来た頃は多分父たちも若く、在留邦人も少ない時代であったと思います。外地に住み、心細い若い夫婦がお互にいたり合って冬の或る日に語り合っている姿が忍ばれます。胎動とあるのは、義妹美代子さんのこと云々。

新国家設立のための胎動と、生まれくる児の胎動とではあまりに解釈が違いすぎる。動乱の最中の中国であったこと、芥川が句の所感を述べなかつたこと、里見病院が「未詳」であったこと等を合わせ考えてみた時、前者の解釈となつたものと思われる。そして、後者の解釈を識つた今、筆者は里見院長の教あつたであろう句の中からあえてこの句を選び、紹介した芥川の意識に注目したい。

訪中の前年、芥川は長男比呂志をもうけた。従つて右の句の「胎動」の主体を比呂志と考えた時、「赤ん坊の出来ない内は、一人前ぢやないね。経験の上でも片羽の人間だね」(大9・4・27 恒藤恭徳と、吾子の誕生をよろこぶ父親龍之介が彷彿せられる。しかし、転じて「胎動」の主体を芥川の所謂子宮回帰型志向のそれと考え合わせた時、この句に対する芥川の眼は少し微妙なもの

芥川龍之介「上海遊記」

となつたのではなからうか。

入院中芥川は「葉餌無徴怪夢頻」(上海一五 病院。傍点筆者)であつたと述べ、「怪夢」の内容については触れていない。手がかりとしては唯一つ

この間家へかへつた夢を見ました本所の家でした義ちゃんが出来てゐました皆が幽霊だと云つて逃げました(略)眼がさめたら悲しくなりました夢の中では比呂志がチョコチョコと駆けてゐました(大10・5・5 芥川道章宛 傍点筆者)

をあげることが出来る。すなわち芥川は、父親として比呂志のことを、そして十八歳まで住んだ本所の家に突然帰つた自分自身を夢に見た。

八

芥川 の 作品 中、表 題 も し く は 副 題 に 直 接 「 母 」 を 付 し た も の に、
「 母 」 (大 10 ・ 10 『 中 央 公 論 』) ・ 「 お 母 さ ん 」 (『 少 年 』 所 収 大 13 ・ 4
25 『 中 央 公 論 』) ・ 「 母 と 子 と 」 (『 貝 殻 』 所 収 昭 2 ・ 1 『 文 芸 春 秋 』)
「 母 」 (『 或 阿 呆 の 一 生 』 昭 2 ・ 10 『 改 造 』) が あ る 。 い ず れ も そ の 発 表
年 代 は 中 国 か ら 帰 国 後 の こ と で あ る 。

愛児を失ひ悲しみにくられていた女の所に、かつて「得意の情」を満面にたたえて吾子を見せつけた隣の女から手紙が寄せられる。その手紙から、自分と同じ不幸に遭遇したことを知り、女は「眼にも唇にも」「烈しい幸福の微笑をうかべ」たという「母」。そし

て、女として生きる母を懐しさと不快の入りまじった感情で思う息子を描いた「母と子」と。これらは母を扱いながら内容は例によってどこかで高見の芥川がいる。が、一つ注目したいのは、二

作品ともに場所の設定が中国（上海・北京）となっている点である。もっとも、「母」の場合、中国より帰国直後の作品であった故、

半ば思いつきに上海を登場させたにすぎず、それ自体に然したる意味はない。あるいは「今日この日本に起つた事としては書きこ

なし悪い」（『澄江堂雜記』三十一）と考えたのかも知れない。しかし芥川は、初めて自身の生いたちを描いた「少年」で、やはり

上海を設定して「お母さん」を描いている。それは保吉が八才か九才の秋、回向院の境内で戦争ごっこをして

いた時の回想である。

彼は立ち上ると、思はず大声に泣きはじめた（略）すると突然耳もとに嘲笑の声を挙げたのは陸軍大将の川島である。

／「や、あい、お母さん泣いてゐやがる、／」（略）保吉は爾來この「お母さん」を全然川島の発明した謔とばかり信じて

ゐた。処が丁度三年前、上海へ上陸すると同時に、東京から持ち越したインフルエンザの為或病院へはひるることになつ

た（略）彼は白い寝台の上に朦朧とした目を開いたまま（略）看護婦は突然椅子を離れると（略）／「あら、お目覚めになつて

いらつしやるんですか？」／「どうして？」／「だつて、今お母さんつて仰言つちやありませんか？」／保吉はこの言葉

を聞くが早い、回向院の境内を思ひ出した。川島も或は意

地の悪い謔をついたのではなかつたのかも知れない」（六）お母さん。傍点筆者

これは、三好行雄や駒尺喜美の言うように、実際に「お母さん」と言つたか否かが問題となるものではない。もとより両者の

云う主題にも異論はない。ただここで筆者が問題提起したいのは、「しみじみ塵勞に疲れた」保吉（芥川）が、ついに自戒を禁忌を

破り、母（生母の原像）を描くに至つたその契機についてである。入院中のことは、確かに特派員という公的立場にあつた芥川か

らしてみれば、「格別上海なるものに大関係もな」いことではあつた。しかし、私人芥川龍之介にとっては、まだその時点では明

かにされていなかったものが、帰国後三年目にして「少年」の「お母さん」となつて表出した。そして「少年」を契機に芥川は、

——破滅への道ではあつたが——ついに「僕の母は狂人だつた」、「狂人たちは皆同じやうに鼠色の着物を着せられてゐた（略）彼等の臭氣に彼の母の臭氣を感じた」（『或阿呆の一生』二）母）に辿り

着いた。

狂氣の子兆に怯える芥川についてはこれまで十分に過ぎる程に論じられてきた。が、怯える子は同時にまた「何の為に又いつ

も己のやうなものを父にする運命を荷つたのだらう」（『或阿呆の一生』二十四）出産」という人の子の親でもあつた。この父の姿を芥

川は自嘲句「老酒に酔つた父の横顔」（『江南游記』二十一）客棧と酒棧の作者、島津四十起に見ていた。

四十起島津長次郎は、明治三十年上海に渡り、『上海在留邦人々名録』や『上海日本電話帳』出版を本業とする傍ら、碧梧桐派の俳人でもあった。昭和二十一年四月に引揚げ、同二十三年兵庫県津名郡志筑にて死去(享年七十七歳)。以上はその略歴であるが、内山完造は四十起を回想し、「邦人中異色の人で、色々逸話のある人であった」と述べている。

碧梧桐派の俳人として彼の作品は、『海紅』に、俳句五・消息及び近況録十五通(うち上海だより九通・新刊「紹介」二冊)上海、漢口、青島案内、『炮きつく裏』を見ることができると述べている。

異色で逸話の多かった四十起に対し芥川は、「好漢」と称し、佐藤春夫もまた「朴訥で親切で然し何処かに調子はずれの所がある。彼を評する為めには好漢といふ言葉が一番適している」と、全く同じ呼称を与えた。佐藤の訪中(再度)は、昭和二年の七月から八月にかけてである。その折、四十起に出会い、非常に関心を示した結果、帰国後彼をモデル化して「老青年」(昭3・1『改造』)を発表した。

四十起は故郷の淡路島を十七歳の時飛び出し、処々を転々とした挙句、氣にそまぬ女房を追い出して、子供は親戚に預け新天地を求め中国に渡った。「人々から理解されない異人種としての烙印を捺され」ながらも、「どんな苦しい中でも生きることが出来た」と述べている。

芥川龍之介「上海遊記」

「お父さまからのお金はまだつきません(略)一日も早く上海に帰れることを願ひ致します(略)その日、夜の御飯をみなたべませんでした。私は泣いて居りました。前のをばさんが親切にして下さりますのでお米を一升いただきました。小さな子供が可愛さうでなりません」と、内地から手紙を寄こす置いてきた吾子にであった。右は「老青年」からの引用である。モデル小説の内容を、即全て事実と鵜呑にして軽々に論じるつもりはもとよりのない。しかし、この子供のことに關しては、信憑性があると考えられる。すなわち芥川もまた、この父子について意味深長な観点から「上海遊記」に一文を記している。

それは四十起の案内で上海の城内を見物した折のことであった。茶館で「ありとあらゆる小鳥の声」に遭遇した芥川は、「殆んど逃げるやうに(略)恐るべき茶館を飛び出した」。しかし四十起は悠然として「少し待つて下さい。鳥を一つ買つて来ますから」と言つて一軒の店に入つて行つた。この時芥川は、「四十起氏を待つ間、その飾り窓の正面にある梅蘭芳の写真を眺めていた。四十起氏の帰りを待つてゐる子供たちの事などを考へながら。」(傍点筆者)と、余情的表現法をとりその印象を述べている。父親を離れ、親戚とは言え他人の家でひたすら父の迎えを待ち侘びている子。その父は今、小鳥に打ち興じている。この光景を、対照を、芥川はじつと見ていた。

芥川はその四十起と蘇州・古揚州にも連れ立っている。蘇州で

は四十起の迂濶さから二人は「大喧嘩」をしている。が、後になつて芥川は「今ではかう云う好漢と、何故喧嘩をしたのかと思つてゐます」（『江南游記』二十五 古揚州〔下〕。傍点筆者）と書いている。これを、碧梧桐の「中天に小さくなつた月を仰いで二人で笑つた。其の笑ひは今までとは違つて、我自らを嘲ける沈痛さが響いた」や、「発車までの時間をどう利用しようか、と頻りに奔走してゐるSには構はないで、停車場の待合室につく然として腰かけていた」との四十起観と比した時、芥川のそれには十分の好意が窺われる。

好意の根底には、四十起の性情から生ずる父子関係の哀れさを、芥川は己が父子の姿に投影させるものがあつた。すなわち、「己のやうなものを父にする」子は哀れと考えつつ芥川はまた「夢の中では比呂志がチョコチョコ駆けてゐました」や、「たんたんの咳を出したる夜寒かな」等の句を作る父親であつた。

はしなくも宇野浩二は、『支那旅行』を境にして、芥川の小説の作品（と素材）が変つた^⑩と述べ、従来の芥川に見ることのできなかつた「心境小説風の作品」が登場してきたことを指摘した。その一因子を、筆者は以上、上海里見病院のことなどに考えてみた。

注⑩ 吉田精一「中国旅行」（『芥川龍之介』吉田精一著作集1）所収、昭54・11（桜楓社）の154頁。

② 「僕の神経衰弱の最も甚しかりしは大正十年の年末なり。」と「病中雜記」に記している。（『芥川龍之介全集』第八巻以下『全集』と略記）昭52・7・53・7 全十二巻 岩波書店）の113頁。

③ 森本修『人間 芥川龍之介』（昭56・5 三弥井書店）の38頁。

④ 正しくは里見病院である。しかし芥川は、「里見さんの病院」（『上海游記』）、「里見病院」（『江南游記』）と書いている。従つて本稿では、「里見病院」あるいは「病院」で以後統一する。

⑤ 『大阪毎日新聞』（大10・3・31 木曜日 朝刊）。

⑥ 佐藤春夫は、昭和二年七月にも訪中している。（本稿、第九章参照）。

⑦ 『大学新聞学叢書之一 中国新聞史』（主編者 曾虛白 中華民国55・4）国立政治大学新聞研究所発行の175頁。

⑧ 『上海游記』（『芥川龍之介全集』新装註解）第六巻 昭40・1 筑摩書房）の8頁。

⑨ 一九八一年夏、里見病院跡を狄思威路（現、溧陽路）741—上海市公安局調べにたずねたが、これは後、里見正義氏により上海事変後転居した住所であつて、芥川の入院した所は密勒路の病院であるとのご教示を得た。

⑩ この部屋のベランダで芥川は記念写真を撮つた。「写真 作家伝叢書 7『芥川龍之介』（昭42・3 明治書院）の76頁参照。

⑪ 「現代作家の生活振り」（『全集』第七巻）の233頁。

⑫ 「夕立雲が反れて湖心の我舟」。これは大正七年、碧梧桐が西湖に游んだ折に作り、里見院長に贈つた句である。表具がなされ、里見家に現存している。

⑬ 里見正義氏のご教示による。なお、筆者が里見正義氏を訪ねたのは、昭和五十七年三月十五日である。

⑭ 「秋」は、芥川の意に反し転換作とならなかつた。このことは周

知の通りである。拙稿「『秋』作品鑑賞」（『近代文学』所収、昭57

・3 学術図書出版）参照。

- ⑮ 里見院長は、芥川の神経質な面を逸速く認め、「乾性肋膜炎」の病名のもと静養をさせたと考えられる。従って身体の方はこの三週間に十分回復していたわけである。だから、南京訪問中、またまた「死にさうな心持になつた」芥川に院長は、「悪いと思つたのは神経ですわ」（『江南游記』二十九 南京（下））と診断したのである。
- ⑯ 本文中に挙げたもの他には「新蒙古縦走記」（昭11・11）や、「徳王とその周囲」（昭12・10）等がある。なお、芥川の村田綱に、「蛮骨稜稜とした村田君」（『江南游記』九 西湖（四））がある。
- ⑰ ⑱に既出の『芥川龍之介全集』第六巻の10頁。
- ⑲ 里見澄子「父の句碑」（『太白』365号昭55・5）の12〜13頁。
- ⑳ 三好行雄「宿命のかたち」（『芥川龍之介論』所収、昭51・9 筑摩書房。駒尺喜美「少年」（『芥川龍之介作品研究』所収、昭43・10 新生出版）。
- ⑳ 『兵庫県昭和俳人名鑑』（昭52・5 神戸市新聞出版センター）。
- ㉑ 内山完造「文芸漫談会の思出」（『魯迅の思い出』所収、昭54・9 社会思想社）の309〜310頁。
- ㉒ 栗田靖編著『海紅総目録（大正篇）』（昭54・5 東海学園女子短期大学国語国文学会）による。
- ㉓ 佐藤春夫「老青年」（『佐藤春夫全集』第七巻所収、昭43・2 講談社）の147頁。
- ㉔ 同右の134頁。
- ㉕ 河東碧梧桐『支那に遊びて』（大8・10 大阪屋号書店）の179及び192頁。
- ㉖ 宇野浩二『芥川龍之介』（筑摩叢書88、昭42・8 筑摩書房）の227頁。

付記 小稿執筆にあたっては、里見正義、澄子、森秋、白秦恒各氏のご教示に負うところが多かった。記して感謝の意を表したい。